The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生 : 概念の整理と展望
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	災害と共生. 2020, 4(1), p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生

ー概念の整理と展望ー

Shrinking Strategy with Dignity for Rehabilitation and Revitalization of Community in an Era of Declining Population
ー Conceptual Analyses ー

渥美公秀[1]
Tomohide ATSUMI

要約
日本学術振興会の課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（実社会対応プログラム）「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生（代表：渥美公秀）について、プロジェクトの概要を紹介し、中心となる概念の理論的整理を行って、プロジェクトの展望と成果の評価に関する論点を提示した。具体的には、縮退という概念を提示し、集落の再生と創生に関する先行研究を整理した上で、縮退による再生・創生を実施するための理論的基盤として尊厳概念を拡張し、実践的取り組みに資するツールを提案した。さらに、集落を舞台に尊厳ある縮退を論じることの意義を論じ、最後に、こうしたプロジェクトが従来とは異なる評価方法を確立する必要があることを指摘した。

Abstract
The present study introduces a research project entitled, Shrinking Strategy with Dignity for Rehabilitation and Revitalization of Community led by the author and funded by JSPS on the Topic-Setting Program to Advance Cutting-Edge Humanities and Social Sciences Research – Responding to Real Society. After an overview of the project, we will present the study's concepts the current plan, and propose a new evaluation system for such a practical social scientific research project. First, it examines the concept of shrinking (e.g., strategies for making a community smaller in an era of declining population). Second, it reviews previous studies on rehabilitation and revitalization of community. Third, it expands the concept of dignity to the shrinking process of community. Fourth, it proposes a few tools to practice in a community. Fifth, it discusses some implications of shrinking strategy with dignity. Finally, it proposes a new evaluation system for this project.

キーワード: 縮退、集落の再生、集落の創生、尊厳、評価
Keywords: Shrinking, Rehabilitation of Community, Revitalization of Community, Dignity, Evaluation

毎年、稲刈りが終わると、誰からともなく、「来年はもうやめようかな」という会話が始まる。体力的に無理だと頷きあう。筆者が、30 年後はどうなっているだろうかと話を振ると、もう死んでいるからわからないと即座に応える。では 5 年後はどうかと振ると、米作をやめようかと言っていた人たちまで、元気に頑張っているよと断言する。

無論、集落の 30 年後はわからないと無責任に考えているわけでもないし、5 年後の元気は、実は空元気だと自覚もしている。では 10 年後はとたたみ掛けて問うことはあまりにセンスがないし、仮に問うたところで返ってくるのはため息ばかりであろう。結局、また誰からともなく、ふと遠い目になって、「どうなるのかのぅ」というつぶやきが漏れ出し、来年の米作については曖昧なまま会話が終わる。

これは、筆者が中越地震（2004 年）以来、ずっと関わらせて頂いている少子高齢過疎の集落での一コマである。この集落も限界集落に他ならず、地震によって半数以上の世帯が集落を離れた経緯がある（Atsumi, Seki, & Yamaguchi, 2018; 山口・渥美・関, 2019）。確かに、移住や出生が望めない以上、集落が消滅する可能性はゼロではない。しかし、現在では、震災復興に関わった大学生や教員を中心に年間数百人もの交流人口があって、田植えや稲刈りは実に賑やかである。有志の集まりもできて、学生を受け入れる体制も整っている。特産品の加工も少しずつ進めている。人々は誇り高く、年老いてきてはいても、いや年老いてきたからこそ、穏やかに充実した生を送っている。無論、下手な感情移入や美化は迷惑だろう。現実には、街に出てパチスロを楽しむ日常もあれば、Facebook などの SNS で気軽な会話も行われている。それでも 10 年後と言われるとふと不安にな

*1 大阪大学大学院人間科学研究科 教授・Ph.D.（心理学）
Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Ph.D. (Psychology)

る。

少子高齢過疎の集落では、おそらく、多くの集落で、同じような風景が見られるのだろう。いったいどうすれば 10 年後への不安が解消されるのだろうか？そして、30 年後、50 年後といった未来が希望を持って描けるのだろうか？理論に支えられた有効性のある実践に同時代的に取り組めないものだろうか？

本稿では、現在実施している研究プロジェクトの中間的な成果をもってこれらの問いに応じていく。まずは、研究プロジェクトを紹介するところから始めよう。

１．研究プロジェクトの紹介

現在取り組んでいる研究プロジェクトは、日本学術振興会の課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（実社会対応プログラム）「尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生(代表：渥美公秀」である（以下、「尊厳ある縮退研究」）。本稿では、プロジェクトの概要を紹介し、中間的な成果として概念の理論的整理を行うとともに、展望と成果の評価に関する論点を提示する。

本プロジェクトは、「尊厳ある縮退」をキーワードとして、人口減少社会におけるコミュニティの再生・創生のプロセスを明らかにし、それらを多様な文化と共生するコミュニティの再構築手法へと昇華し、実務家による橋渡しを得て社会実装することを目的としている。研究チームは、実務家を含む 12 名で構成される。チームは、理論的背景・事例研究グループ、現場実践研究グループ、政策研究グループに分かれて 2018 年度から 2022 年度にかけて研究と実践を進めている。

研究フィールドは、研究チームが既に関わりを持っていた兵庫県赤穂郡上郡町赤松地区 15 集落（内 2 つは消滅しつつある集落）である。また、新潟県小千谷市、同県刈羽村、岩手県野田村など自然災害によって被害を受けたことを契機として研究代表者らが長期間にわたってフィールドワークを継続してきた地域を参照している。さらに、研究会のメンバーが個別に研究や事業を展開してきた奈良県十津川村や兵庫県尼崎市などをも視野に入れている。

理論的背景・事例研究グループは、人口減少社会において、住民の自発的意思によりながら集落を持続可能な形で存続する集落再生プロセス、および、同じく住民の自発的意思によりながら集落を閉じて別様の生活を目指す集落創生プロセスにおいて、尊厳ある縮退という概念の内容や位置づけを行う。また、研究チームが関わってきた各地の事例を過疎地活性化や集落創生といった観点から再整理し、その背後にある理論的基盤についてまとめてきている。

現場実践研究グループは、兵庫県赤穂郡上郡町赤松地区の 15 集落について調査・実践を行う。15 集落には、集落創生プロセス、集落再生プロセスを選択する集落が混在する。まずは、「集落問診票」を用いた集落診断を実施し、都市計画・まちづくりや公衆衛生学の知見を援用しながら、集落の地域活動（顔あわせ指標）、ネットワーク資源（つながり指標）、集落文化（結びつき指標）を自己確認するとともに、他己確認（集落間）の場を用いて、集落の伝統行事の継承や暮らしを支えるコミュニティ機能（介護、育児、弔い等）の相違点を確認し合い、「集落再生」、「集落創生」上の課題を具現化しつつある。また、集落問診票をもとに集落再生と集落創生のプロセスを住民自身が選択するための仕組みを「集落夢会議」として導入していく。

最後に、政策研究グループは、集落再生と集落創生を支える法制度的基盤について検討している。ただ、実効性を高めるためには、最前線で政策を実践する人々、すなわち、行政職員と住民との関わりをつぶさに検討する必要がある。現在は、集落再生・創生を担当する行政職員のネットワーク化による実践と政策提案が目指されている。

なお、成果は、多様な住民（高齢者や障害者など）や多様な外来者（NPO・専門家、観光客など）とともに文化基盤（伝統行事など）、経済基盤（生業・観光など）、社会基盤（交通・福祉など）を融合しながら未来を創造していく手法として提案する。その上で、実務家（NPO・自治体職員など）の協力を得て、他地域に展開しうる実効性をもったコミュニティ再構築手法を開発し、社会実装を行うところまでが研究プロジェクトである。

本稿では、すべてのグループを総括する立場から、プロジェクトの概要を説明し、冒頭の問いへの中間的な応答としたい。具体的には、尊厳ある縮退について、まず縮退について論じて本研究の位置づけを述べる（第 2 章）。次に、集落再生と集落創生に関する定義と事例を紹介する（第 3 章）。そして、縮退による集落再生・創生に取り組むためには理念として尊厳が必要であり、実践するためのツールが求められるとして、尊厳概念を理論的に検討し（第 4 章）、実践的なツール案を提示する（第 5 章）。最後に、本研究の社会的意義と評価について展望を提示する

（第 6 章）。

２．尊厳ある「縮退」

集落の限界、衰退、存亡といった議論はこれまで広く注目を集めてきた。例えば、過疎高齢化が進行した限界集落が消滅の危機に瀕しているとの指摘（大野, 2005）があれば、高齢化によって消滅した集落はないという議論（山下, 2012）が起こる。消滅する地域があるとして自治体ごとのデータを沿えたレポート（増田, 2014）が出れば、即座に、それは政策の罠だと反論（山下, 2014）が出る。一方、人口動態に注目して、特定の年に何が起こるかを想定して年表に整理したり（河合, 2017）、わが国は縮小するという事実を衝撃だとして伝えたり（NHK スペシャル取材班, 2017）している。これらは、週刊誌やテレビ番組を経て、ほとんどが新書版で発刊されており、多くの人々の注目を集めていることが分かる。

尊厳ある縮退研究では、こうしたセンセーショナルとも言える論戦から多様な論点を学びつつ、以下の 2 点を提示する。まず第 1 に、尊厳ある縮退研究では、集落の存続あるいは消滅のいずれかを推進するものではない。そもそも、集落の存続か消滅かといった二項対立的な立場はとらない。そうではなく、プロジェクト名が示しているように「縮退」という概念を導入する。第 2 に、尊厳ある縮退研究では、集落の縮退は、行政が計画するのではなく、また、経済論理（のみ）によって推進されるのではなく、集落住民とその集落に関係する人々が相互に対話を通じて進めていくものとする。

縮退は、英訳すると shrink となるが、尊厳ある縮退研究では、shrinking という現在分詞を充て、縮退が動的な概念であることを強調している。この点については、矢守（印刷中）が精緻な議論を展開しているので参照されたい。ここでは、集落がいわばどちらの方向を向いて考えていくかという点に対応する概念だと紹介するに留める。すなわち、従来のように集落が活性化し、発展していくという価値観をもとに現状に対応するのではなく、集落は沈静化し、充実していくという価値観（を醸成してそれ）をもとに現状を再考していくということを指している。確かに、縮退には、極値として集落の消滅が理論的には設定され得るが、関連分野で議論されてきた論点（安楽死・尊厳死にまつわる議論）などを参照しながら、留意点を挙げる。

一方、集落の縮退は、集落住民とその集落に関係する人々が相互に対話を通じて進めていくものとするのは、従来の過疎論・限界集落論が、そこに住む人々にとってどのような問題として経験されているのかが把握されていないという批判（植田, 2016）や、「村の人々がどう思っているかが大切だ」という中学生の声（かつやま子どもの村中学校子どもの村アカデミー, 2018）を承けている。確かに、集落の衰退であるから、集落住民による選択や決定がもっとも重視されるのは当然であろうが、ここに集落に関係する人々との対話を含めたのは、自己決定論の陥穽ー選択肢の限定された中で決定を強いる欺瞞（安藤, 2019）といった理論的な問題や、AI など科学技術への対応（山崎, 2020）といった実践的な問題が関係するからである。

ここでは、これまでの議論を簡単に振り返り、安楽死・尊厳死といった生命倫理の分野で生じている議論に少し触れておきたい。まず、限界集落論（大野, 2005）は、「65 歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落」を巡る議論である。提唱者の大野は危機を喚起することを目的としたのかもしれないが、現状では、特定の集落が限界なのか限界でないのかといった表層的な言説が見られる。山下（2012）は、高齢化による機能不全によって消滅した集落などないと指摘したが、そうした集落の有無ばかりに注目するのではなく、そこに住む人々にとってどのような問題として経験されているのかが把握されなければならない。畑本（2010）が指摘するように、伝統芸能・文化の衰退、山村の原風景の喪失、自然環境の貧困化などを論拠に、限界集落は「地域を活性化するために再生しなくてはならないという主張が生み出されるのならば、そこには飛躍があろう」と考えざるをえない。注目すべきは、地域住民一人一人のくらしであって、伝統、文化、原風景、環境といった抽象化されたものではないからである。

一方、増田による報告（通称増田レポート、増田, 2014）は、消滅する地域を名指ししてセンセーションを巻き起こしたが、それは罠だという指摘（山下, 2014）は、的を射たものである。集落は元気であって消滅などしない、ましてや、中央からの選択（と集中）によって消滅させられたりなどしないという山下の議論はその通りである。

限界集落論や地域消滅論に対する代案もいくつか示されている。例えば、世帯間の地域住み分け（山下, 2012）や二地点居住を含めた多様性を認め合う共生（山下, 2014）である。また、その方法として例示

されたT型集落点検（徳野, 2007）といった手法が紹介されたりもしている。尊厳ある縮退研究もこれらを参照しつつ、とりわけ、実際に現場で集落住民と集落に関係する人々が対話を推進するためのツールやネットワークについて検討している（第5章）。

ところで、集落の縮退は、安楽死・尊厳死を巡る議論を参照することでより深く理解できる。無論、ここで死が不可避かつ不可逆的な極点であることをもって、集落の縮退も集落の消滅を意図していると考えるのは全くの誤解である。そうではなく、昨今の安楽死や尊厳死を巡る議論の中に、生こそを重視する立場があり、その点から、縮退という概念を深化させる契機があるという指摘である。

安楽死や尊厳死のような死に到らせる行為は、積極的な安楽死、医師幇助自殺、延命治療の手控えと中断という具合に分類される（安藤, 2020）。日本では、積極的な安楽死も医師幇助自殺も合法化されておらず、医師がそのような行為を行えば殺人罪に問われる。延命治療の手控え・中断は、法制度としては成立していないが、終末期の医療現場では一つの選択肢となっており、これを尊厳死と呼んだりする。

安藤（2020）が指摘するとおり、昨今では、尊厳死という言葉を使うこともなく、さらには、終末期とも言えない患者にも治療の手控えを適用するという事件（2019年公立福井病院の人工透析中止問題）が発生していたことは由々しきことである。また、積極的な安楽死や医師幇助自殺を欧米のように合法化しようという動きもあり、NHKスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」において安楽死が合法化されているスイスで安楽死を遂げていく姿が放映され賛否両論を巻き起こした。特に、日本自立生活センター（JCIL）による批判－障害や難病を抱えて生きる人たちの生の尊厳を否定し、また、今実際に「死にたい」と「生きたい」という気持ちの間で悩んでいる当事者や家族に対して、生きる方向ではなく死ぬ方向へと背中を押してしまうと言う強烈なメッセージ性をもっている－は、極めて重大な指摘であろう。安楽や尊厳といった響きのよい言葉を安易に持ち込む、笑顔で、そして、よかれと思って人々を不可逆の過程に追い込んでいくことへの戒めとすべき指摘である。

こうした現状から何を学べるだろうか。結局、安楽死・尊厳死は、「悪い生」の代わりに「よい死」を（こんな状態で＜生かされる＞ぐらいであれば、＜死んだ方がよい＞）という考えに基づいているという点である。集落の問題に戻れば、集落が限界だ、地域の消滅だと「悪い生」を煽り、リスク管理だの自己決定だのといった言葉を振りかざして、それが無理なら「よい死」へと誘うというのでは、安楽死・尊厳死と同じ轍を踏むことになる。ここでこそJCILの批判を想起すべきである。安藤（2020）が指摘しているように、我々にとって大事なことは、「悪い生」の反対は決して「よい死」ではなく、「よい生」であるはずだということである。

確かに、生が終わるように、集落も終わるのかもしれない。しかし、その時のために何をするかということは、決して生をあきらめるということではない。発展しかあり得ない、活性化しなければならないなどと大仰に外部から支援と称した施策を押しつけるのではなく、縮退という方向を認めて、集落住民と集落に関係する人々が対話を重ねることが、現在の生の充足感を取り戻すことへと繋がっていくのではないだろうか。

３．集落再生と集落創生の事例

尊厳ある縮退研究では、集落の再生と集落の創生をそれぞれ以下のように定義して区別する。集落の再生とは、住民の自発的意思によりながら集落を持続可能な形で存続することである。一方、集落の創生とは、住民の自発的意思によりながら集落を閉じて集落として別様の生活を目指すことである。すなわち、両者が異なるのは、一旦集落を閉じるかどうかである。言い換えれば、集落再生も集落創生も集落の消滅とは違って、集落は存続し、そこに人が存在する。

もちろん、集落の人口を個人の集積としてだけで捉えること必要はない。まず、これからの時代を展望すれば、AIなどを入れておくべきであろうし、そもそも、集落を考えるときには先祖や未来の子ども達を想定するのだから、いわゆる人口だけでは不十分だという議論（山崎, 2020）もあってよい。ここでは、AIまで踏み込まず、また、各所で議論されてきた交流人口、関係人口（田中, 2017）の解説は省略し、人口の数え方そのものに問題提起を行っている活動人口（藤井, 2018）に言及しておこう。

藤井（2018）は、従来の人口の考え方では、活動量が多い人も少ない人も、夜間人口でみるならば等しく「1」というカウントになると問題を提起する。そこで、活動量が多い人は、同じ地域内であってもダブルカウントする。換言すれば、まず人口の単位を離散的に考えず連続量とする。次に、活動量をそれに対応させるというわけである。ここで、活動量

が衰えると活動人口が減ると単純に考えてはいけないだろう。例えば、24時間介護の必要な障害者は、多様な人々が周囲で、濃淡交えた活動を展開することを必要とする（渡辺, 2003）。そこに住んでいることではなく、そこで活動していることの量をもとに人口を考えていく。今回は、尊厳ある縮退研究における政策研究グループの動きは紙幅の関係で省略しているが、政策においては、活動人口といった理論的指標をいかに測定可能な指標とするかという点に議論が集まる。そして、理論研究としては、そもそも尊厳ある縮退において人口を扱うとはどういうことかといった点を議論していくことになる。

実際、集落の再生・創生に人口という概念は含まれていない。集落を観察し、描写する際に、生活基盤維持を越えた活性化を唱えたり、住民の苦難と悲惨さを強調したりすることは慎むべきであろう（畑本, 2010）。むしろ、植田（2016）が指摘するように、存続の岐路に立つと、集落の範囲、領域、多様な関係が可視化されるという点に注目し、それが人々にどう体験されているかという原点に立ち戻って、集落とは何かというところへと議論が進む。植田が結論するように、集落の存続には、通常、空間的継承（場所的普遍性）が注目されるが、時間的継承（時間的普遍性）を視野に入れることを考えたい。そうすれば、縮退の方向を見据えても、集落の消滅はありえず、多くの場合は、同じ場所で集落の持続可能性を考えていく再生が想定される。仮に、一旦集落を閉じる創生であっても、同じ場所で集落を再開すること（例えば、集落の第2幕）に縛られなければ、別の場所との間で2地点居住化を推進するとか、集団移転後の場所で伝統行事を再開するといった時間的な継承ができることを考えていくことになる。

実際、集落の再生に関しては、集落の活性化という尊厳ある縮退研究では回避している文脈ではあるけれども、（同じ場所で）集落の持続可能性を達成していった事例は枚挙に暇がない（例えば、岡田・平塚・杉万・河原, 2010）。一方、集落の創生は、災害によって一旦集落を閉じて移転せざるを得なかった事例として福島を注視し続ける必要があるし、中越地震（2004年）によって集落ごと移転して新たな土地で再スタートした小千谷市十二平地区のような事例を追うことも忘れてはなるまい。また、平成の合併前に、村史を編纂したり、記念碑を建てたりして、一旦行政上の単位で閉じて再スタートした事例などが数多く残されている。

４．「尊厳ある」縮退

本章と次章では、集落の再生や創生をどのように進めるのかという問いに応じておきたい。尊厳ある縮退研究では、理念的には尊厳をもって、実践的にはツールやネットワークを使って対話を推進することによってと応じることになる。まず本章では、尊厳について検討する。

尊厳という言葉は、1877年の新聞記事に現れたのが最も古い（加藤, 2017）とのことであり、明治の近代化後に日本語に定着したものだという。同様の経緯をたどった他の多くの概念のように、日常会話においても使われ、様々な分野において議論もされるが、必ずしもその内容について定説となる拠り所がなく、曖昧さを残している。例えば、文学においては、ノーベル文学賞作家カズオ・イシグロの小説「私を離さないで」は日本語に訳され（イシグロ, 2006）、映画にもテレビドラマにもなって、クローン、臓器移植、死といったテーマを伴って流布し、尊厳について考える機会となった。一方、哲学においては、加藤（2017）の整理によれば、まず1785年に提出されたカントの定言命法－みずからの人格と他のすべての人格のうちに存在する人間性を、いつでも、同時に目的として使用しなければならず、いかなる場合にもたんに手段として使用してはならない（カント, 2012）－が引き合いに出される。そして、ショーペンハウエルによる批判－尊厳の毀損は議論できるが、尊厳の尊重といっても具体的な内実が一義的に決まらない－が言及され、結局、尊厳といえば、対象の無条件の保護、安易な手段・道具的扱いの拒否を生むので、思考の停止を導く実効性のない概念かもしれないという疑念が呈される。

カントが人間を前提としていることが批判されたりする。例えば、相手を人間ではないと認識すれば、相手の尊厳は無視される（例えば、ホロコースト）からである。では、人間を前提とすれば、そこに存在することだけで尊厳を維持することになるのだろうか。アウシュヴィッツの極限状況を考えれば、単に生き延びること以上の何らかの質的規程が施された生を認めたい。それが尊厳なのかもしれない。

こうして議論は延々と続くことになる。尊厳ある縮退研究では、このような哲学（史）的議論に深く入り込むことは避け、1点だけ批判を行ってより実効性のある概念へと拡張したい。すなわち、これまでの尊厳に関する議論は、個人概念であったということである。

ここでグッと現場に近い視点に立ち戻ってみる。

人々は、高齢となり、次第に依存の度合いを高めていくと、自分自身の存在を絶対視しない可能性や自らの有限性を感じる可能性、制御不可能な経験をする可能性などが増えてくるが、この場面でこそ尊厳が語られるという（加藤,2017）。言い換えれば、そのようになって初めて、個人主義が超克され、尊厳が社会性をもつことが示される。振り返ってみれば、そもそも、尊厳ある縮退研究は、このような相互依存を高めている状況に注目している。尊厳ある縮退研究における尊厳は最初から集合概念である。

実は、生命倫理では、尊厳とは存在に関する集合概念であった。小松（1996）は、脳死を契機とした臓器移植を批判的に議論する中で、死が集合的な承認によって成立していることを示したが、その後も一貫してその立場から、尊厳死や人間の尊厳という概念を巡って議論してきた（小松, 2012; 2013）。そして、尊厳とは、人間の中に宿る何らかの実体や状態それ自体ではなく、関係性を通じて出来する事柄に他ならない（小松, 2012）と結論している。

尊厳ある縮退研究における尊厳という概念も、集落そのものに何らかの実態や状態として宿るのではなく、集落の住民間で、また、集落に関わる人々を通じて立ち現れる集合的な概念として捉える。その上で、集落を（都市の）発展のための手段としてしか捉えないとか、さらには、集落の住民がどのように考えているかを捉えずに活性化などと言い出したり、集落の基盤を整備するといって集落の物的な面しか注意を払わない施策などは大いに批判していく。そもそも集落のくらしを人口という指標に還元したり、何らかの機能を外部から設定し、その衰えをもって限界だ消滅だなどとしたりする議論は、論外という立場をとる。尊厳ある縮退研究における尊厳とは、集落の住民と集落に関係する人々が対話を通して、互いの人生の価値を認め合うことができることを指している。

５．実践ツールの開発に向けて

尊厳ある縮退は、集落の住民が（集落に関係のある人々を交えて）、集落について語り合うことが核となる。しかし、現場に出てみると、集落の活性化ならともかく、縮退について語り合うことは誰しも気が進まない。実際には、語り合わなければ始まらないという自覚は、その集落の住民にこそ宿っているだろう。しかし、話を切り出しにくい。だとすれば、何か話し合いがやりやすくなるツールがあればよいのではないだろうか。

ここでは関連する事象などを参照しながら二つのツールと一つのネットワークを提案する。ただし、尊厳ある縮退研究は、まだその途上にあってこうした提案を実現しておらず、今後の実践的課題として残っていることは明記しておきたい。

5.1　集落エンディングノート

昨今では、終活という言葉が聞かれる。もともと終活という言葉は、2009年8月から12月にかけ週刊朝日で連載された「現代終活事情」という全19回の連載による（木村・安藤, 2018）。当時は、葬儀やお墓の準備が中心であったが、2014年あたりから、サクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジングといった言葉と結びつけて語られるようになり、人生最後の時期を充実して過ごすための活動という意味に変化したようである。そして、今では、人生最後の身だしなみとして「エンディングノート」など、終活の内容を事前に指示する書式を整えた本が売られるようになっている。

木村・安藤（2015）によれば、エンディングノートに取り組む高齢者の動機は「迷惑をかけたくない」、「物の整理や預金等財産の整理について取り組みやすく満足感を得られやすい」、「死や死の備えについて話をする機会がなくそれを強くはないものの望んでいる」とされており、エンディングノートの主な項目は、「医療・介護の意思決定」「葬儀・墓の内容決定」「親しい者への伝言作成」「財産管理」「持ち物管理」「経歴作成」「連絡先作成」「相続内容決定・遺言作成」「自分史作成」の9つに分類できるとしている。また、地方経済総合研究所（2017）の調査によれば、「終活」という言葉の認知率は9割強あり、終活の実施を検討している人は7割あるという。中には、エンディングノートを作成している人々も多く見られた。

木村・安藤（2018）は、終活について語ることと死について語ることは、自らが亡くなるという事実を想定する点では共通しながらも、現実に起こるかもしれない様々な問題・課題を考えることと、内心における問題・課題を考えることの違いを持っていると総括し、終活として自らの老いや死に関する様々な事柄に取り組むことは、実際に何かをしているという実感、今生きている実感、そして亡くなった後も安心できるという満足感にもつながるとしている。実際、終活をしているその時に人は、死から、少なくとも死の不安からは、一時的に遠ざかっているのかもしれない。

これらの知見を尊厳ある縮退に応用することは一案ではなかろうか。「集落のエンディングノート」は、集落が消滅するからではなく、集落がいつか閉じる時期が来たとき、その時までを充実して過ごすために書いていくものである。

5.2 縮退すごろく

人生ゲームという盤上ゲームは多くの人々が体験したことがあるだろう。まちづくりの現場では、リアル人生ゲームと称して商店街の店舗を渡り歩くといった活動も行われているようである。このゲームは年々ヴァージョンを重ねているそうで、各コマのエピソードはその時代に合わせて変更されている。そして、現在、通常は、億万長者になることが成功であって、貧乏農場に行くことが失敗とされる。

尊厳ある縮退は、集落の消滅を意味しないから、最後に消滅は設定しない。しかし、集落をそのまま維持していく集落再生と、集落を時空間的に拡張して捉えていく集落創生をゴールとする。もちろん、成功も失敗もない。こういう盤上ゲーム「縮退すごろく」を制作し、集落の人々と一緒に楽しみながら縮退を考えていくというアイデアである。

5.3 縮退ネットワーク

集落創生を考える際に、集落を時空間的に拡張しているとはいえ、一旦集落を閉じる。先述したように集落の経緯を取りまとめ、記念碑を建立するといった事柄は行われてきた。こうした事柄を意義深いものとするために、儀礼を整えることが必要であろう。

ここで尊厳ある縮退は集落の消滅は想定しないことを改めて強調した上で、葬儀を参照する。佐久間（2019）は、葬儀には、いったん儀式の力で時間と空間を断ち切ってリセットし、そこから新たに時間と空間を創造して生きていくという意味づけができるとし、その役割として、社会への対応、遺体への対応、霊魂への対応、悲しみへの対応、様々な感情への対応という5つの役割を挙げている。また、葬祭業の重要性を述べる中で、1996年に発足した厚生労働省が認定する「葬祭ディレクター」という資格制度に触れている。「技能審査制度に合格することで認定されるこの資格は、葬祭業界で働く人にとって必要な知識や技能のレベルを審査し、より一層の知識・技能の向上を図ることと併せて、葬祭業に携わる人々の社会的地位の向上図ることを目的としている。葬祭の相談から会場設営、そして、式典の運営などに関する詳細な知識と技能を測る。「遺族心理、宗教などの知識、遺族などから多方面の質問に応答できるか、司会能力、マナーなど、悲嘆の中にいる遺族への配慮も欠かせない要素となってくる」（p.151）。さらに、事前に対話の糸口を用意する（個人の思い出、個人の人柄や長所）、遺族はつじつまの合わない話、前回と違った話をすることがあるが、気にせず聞き流すといったケアという視点を大切にしているという。

集落の縮退について対話を続けてきた結果、同じ場所で別の集落として再出発するにしても、別の場所で伝統行事などを継続することを誓っても、一旦集落を閉じるという集落創生を選んだ場合、これまでの集落をどのように閉じていくかは、極めて重要な場面である。その際、葬祭の専門家のように専門家がいることは重要な実践課題ではなかろうか。集落を一旦閉じるということにおいて求められる経済的、対人的、情緒的配慮について十分な情報と配慮をもった人材の存在である。

もちろん、そういう人材はまだ存在しないが、例えば、過疎対策を担当する行政職員が、未だ大きな流れとしての活性化には抗えないとしても、縮退に関する知見を深め、集落創生においてどのような情報と配慮が必要になるかを身につけていくことは必要であろう。そのためのネットワークを構築することが3つめの提案である。

６．社会的意義と評価に向けて

最後に、尊厳ある縮退研究を進めていくことの社会的な意義と研究の評価のあり方について現時点での考察をしておきたい。まず、当然のこととして思い浮かぶのは、現代の日本社会がいわゆる右肩下がりの状況にあることである。本稿で採り上げた限界集落論や増田レポート、および、人口減を捉えた様々な議論は、人口の減少を日本という国家・社会の前代未聞の危機として提示している。仮にそれを危機と呼ぶことを認めても、その解決策は、国家による人口移動でしかないのだろうか。事例としては多くを紹介できていないが、全国の様々な集落を歩いた経験だけからしても、人々は元気に充実した生を享受している。まずは、そのことをしっかりと認めることから始める必要があろう。

四半世紀前、阪神・淡路大震災が発生したときには、全国からボランティアが救援に駆けつけた。現在では、災害ボランティア元年と呼ばれた現象を国家をはじめとする大きな秩序へと回収しようとする

ドライブが強力に働いている（渥美, 2014）。本来、災害ボランティア元年から学ばなければならなかったのは、災害ボランティアの臨機応変な対応と、被災地の人々との対話のあり方、対話の場の作り方であったはずである。そこには、圧倒的に寡占的な市場経済の論理とは異なる原理が見えていたのだから。少子高齢過疎の集落に対して同じ過ちを繰り返してはならない。つまり、市場経済の論理に圧倒されるのではなく、臨機応変な対応と対話の（場の）あり方にこそ焦点を当てて取り組んでいかなければならない。尊厳ある縮退は、集落外部の権力による選択と集中といった愚弄に抗い、新たな価値観を醸成していくという社会的意義がある。

さらに、過疎問題は人口問題として都市問題の裏返しでもあることを思えば、こうして少子高齢化の進む過疎の集落について尊厳ある縮退と考えることは、都市問題に応じることにもなる。都市計画からの様々な提言（例えば、饗庭, 2015）にも尊厳ある縮退の考え方を適用していくことで、価値観の変革が生じる可能性があるという社会的意義を見ておきたい。

ただし、現状は、もはや、過疎集落であれ、都市であれ、コミュニティの住民のニーズを捉え、コミュニティの住民の自己決定に委ねていればいいという状態ではない。AIに代表される科学技術の進展や、気候変動などによる世界観の変化など、実に多様な展開がコミュニティという範域を（大きく）超えて急速に進展するからである。だとすれば、山崎（2020）が指摘するように、従来の意味での当事者（人間）以外のどんなアクターが互いに関与し、秩序を成り立たせているのかといった観点から尊厳ある縮退を考えていくことは、これからの世界を構想していくという大きな社会的意義が見いだされよう。

さて、このような研究を評価する際に考慮しておくべき事柄がいくつかあるので、最後に指摘して本稿を閉じよう。尊厳ある縮退研究も研究なのだから、学術論文の量と質によって評価するというのは当然であろう。2020年1月に開催された日本学術振興会のシンポジウムでは、この点について白熱した議論が展開された。いわゆる理科系の科学論文では、論文が得点化されて評価されているが、人文・社会科学は同じような評価システムでよいのかという問いかけであった。学術論文が主として研究者、特に同分野の研究者に読まれて評価されている点には合意を得たが、十分な改革案は出されなかったように思う。中でも次の2つの点は、尊厳ある縮退研究に直結するので挙げておこう。

まず第1に、尊厳ある縮退研究は、誰に評価されるのかという点である。日本学術振興会の学術研究を支援するプロジェクトとして採択されたのであるから、日本学術振興会に評価されるのは当然である。具体的には、そこに集う評価委員である。評価委員は研究者であろうから研究者に評価されることになる。もってまわった言い方になったが、結局、研究者が研究を評価していることになる。しかし、尊厳ある縮退研究は、研究者からの評価だけでなく、いや、それ以上に、集落の人々から評価されなければ意味がないと言えないだろうか。もちろん、研究は社会とそんなに直結しないものだなどと言いつのれば、プロジェクト「実社会対応プログラムResponding to Real Society」が崩壊する。確かに、集落の人々が直接評価するのは困難かもしれない。だとすれば、評価者は、評価委員会の席に座り報告を読むだけではいけない。評価者こそが現場に出て現場の人々の（尊厳ある縮退研究に対する）声を聴いてくることが必要ではなかろうか。また、評価に対面することがさらにその地域の尊厳ある縮退を巡る住民の価値観や考え方を醸成していくことに繋がりはしないだろうか。

第2に、尊厳ある縮退研究は、どの時点で評価されるべきだろうか。自然科学の知見はそもそも更新型であり、古い知が新たな研究によって更新されていく。そのスピードが問題となり、頻繁に出版される雑誌に掲載されること、しかも次の更新作業につながりやすい雑誌に掲載されることが尊ばれる。一方、人文・社会科学の知見は蓄積型であり、古い知が新たな研究によって更新されるというよりも古い知に新しい知が追加されていく。スピードよりは、より多くの多様な人々に評価されることが求められる場合も多く、いわゆる論壇として一般に流通する雑誌に執筆したり、いくつかの論文をまとめて書籍として一般向けに販売することで流布する工夫をしたりといったことが行われる。だとすれば、評価は、論壇で注目を浴びたときだろうか、書籍が発売されたときだろうか、書籍が第2刷を経たときだろうか、いや、20年後の図書館で手に取られたときだろうか。

著者の専門とするグループ・ダイナミックスでは、その成果を言説の変化であるとしている（渥美,2014; 杉万, 2013）。尊厳ある縮退研究でいえば、現場となった集落で人々の言説が変化するということが成果である。それをどのように伝え、どのように評価してもらうことになるのか。このことを含めて研究プ

ロジェクトを推進していくことになる。

参考文献

饗庭伸（2015）都市をたたむ：人口減少時代をデザインする都市計画　花伝社

安藤泰至（2019）安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと　岩波ブックレット

安藤泰至（2020）「死の自己決定」に潜む危うさ　すばる 4月号, 172-181.

渥美公秀（2014）災害ボランティアー新しい社会へのグループ・ダイナミックス　弘文堂

Atsumi, T., Seki, Y., & Yamaguchi, H. (2019). The Generative Power of Metaphor: Long-Term Action Research into the Recovery from Disaster of Survivors in a Small Village. *Disasters*, **43**(2): 355−371.

地域経済総合研究所（2017）「終活」に関する意識調査 Retrieved from https://www.dik.or.jp/wp-content/uploads/2017/05/p_syukatsu_1.pdf　(2020年3月17日)

藤井多希子（2018）　人口・家族変動を踏まえた新たな地域構造の捉え方：人の「対流構造」と「活動人口」という視点　都市計画, **67**(1), 46-49.

畑本裕介（2010）限界集落論の批判的検討－地域振興から地域福祉へ　山梨県立大学人間福祉学部紀要, **5**, 1-15.

イシグロ, K.（2006）わたしを離さないで（土屋政雄訳）早川書房

ヨナス, H.（2002）　責任という原理－科学技術文明のための倫理学の試み（加藤尚武監訳）　東信堂

カント, I. (2012) 道徳形而上学の基礎づけ（中山元訳）　光文社古典新訳文庫

加藤秦史（2017）尊厳概念のダイナミズム：哲学・応用倫理学論集　法政大学出版会

かつやま子どもの村中学校子どもの村アカデミー,（2018）中学生が書いた消えた村の記憶と記録―日本の過疎と廃村の研究（堀真一郎監修）　黎明書房

河合雅司（2017）未来の年表：人口減少日本でこれから起きること　講談社現代新書

木村由香・安藤孝敏（2015）エンディングノート作成に見る高齢者の「死の準備行動」　応用老年学, **9**(1), 43-54.

木村由香・安藤孝敏（2018）マス・メディアにおける終活のとらえ方とその変遷：テキストマイニングによる新聞記事の内容分析　技術マネジメント研究, **17**, 1-19.

小松美彦（1996）死は共鳴する－脳死・臓器移植の深みへ　勁草書房

小松美彦（2012）生権力の歴史－脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐって　青土社

小松美彦（2013）生を肯定する－いのちの弁別にあらがうために　青土社

増田寛也（2014）地方消滅：東京一極集中が招く人口急減　中公新書

望月優大（2019）ふたつの日本：「移民国家」の建前と現実　講談社現代新書

NHKスペシャル取材班（2017）縮小ニッポンの衝撃　講談社現代新書

岡田憲夫・平塚伸治・杉万俊夫・河原利和（2010）地域からの挑戦―鳥取県・智頭町の「くに」おこし 岩波ブックレット

大野晃（2005）限界集落―その実態が問いかけるもの　農業と経済, **71**(3), 5.

佐久間庸和（2019）グリーフケア・サポートの実践　島薗進・鎌田東二・佐久間庸和「グリーフケアの時代：「喪失の悲しみ」に寄り添う」弘文堂 pp.137-197

杉万俊夫（2013）グループ・ダイナミックス入門―組織と地域を変える実践学　世界思想社

田中輝美（2017）関係人口をつくる－定住でも交流でもないローカルイノベーション　木楽舎

植田今日子（2016）存続の岐路に立つむら：ダム・災害・限界集落の先に　昭和堂

渡辺一史（2003）こんな夜更けにバナナかよ　北海道新聞社

山口洋典・渥美公秀・関嘉寛（2019）メタファーを通した災害復興支援における越境的対話の促進－新潟県小千谷市塩谷集落・復興 10 年のアクションリサーチから　質的心理学研究, **18**, 124-142.

山下祐介（2012）限界集落の真実：過疎の村は消えるか？　ちくま新書

山下祐介（2014）地方消滅の罠：「増田レポート」と人口減少社会の正体　ちくま新書

山崎吾郎（2020）消滅というリアリティに向き合う－非人間的な存在との関わりを捉えなおす　志水宏吉・河森正人・栗本英世・檜垣立哉・モハーチ ゲルゲイ（編著）「共生学宣言」大阪大学出版会pp.257-274.

矢守克也　（印刷中）　シュリンク・シュランク・シュリンキング－縮小の「前」と「後」－　災害と共生